

■WAVE

・体育の授業にICTの導入を ————— 水島 宏一… 3

■アクセス ナウ！

・からだで生きる ————— 井上 邦子… 4

■実践報告 (①5年生・体力を高める運動／②2年生・とび箱遊び)

①空手の教材化の試み ————— 長嶺 文士郎… 6

②新教育課程において求められる授業実践の研究 ——— 澤口 琢／島田 忠昭…10

■連載／外野席から〈第29回〉

・「女子スポーツ」という新大陸 ————— 岡崎 満義…14

■連載／『体育の学習』を使った授業〈第4回〉

①5年生・バスケットボール ————— 中西 聖司…16

②6年生・体ほぐしの運動 ————— 高木 孝輔…18

〈座談会〉副読本の力、『体育の学習』の力

松田 恵示／鈴木 聡／福島 真実／高木 孝輔…20

■こんなときは？ 教えて！ 体育指導のくふうとアイデア ——— 美越 英宣…26

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



長嶺先生◆必要充足の体づくり運動に、「強くなりたい」「美しくなりたい」という人間の根本的欲求を満たす、武や美の運動遊びを取り入れるのはどうでしょうか。児童がより運動に熱中するかも。今後も空手の授業実践頑張ります！



澤口先生◆「子どもと一緒につくる、楽しい体育授業」をめざし、横須賀市小学校体育研究会の先輩方や仲間たちから多くの刺激を受け、日々勉強しています。自分自身が楽しむことを忘れず、これからも実践を重ねていきたいです。



島田先生◆横須賀市小学校体育研究会で先輩方からのご指導をいただきながら、多くの仲間たちと体育の研究に励んでいます。「わかる、できる、たのしい」体育の授業づくりをめざし、今後も日々精進していきたいと思います！



中西先生◆子どもたちの「できた」「やった」という喜びの表情や歓声が、日々の実践の励みになっています。これからも、体を動かすことが大好きな子どもを1人でも多く育てる実践を重ねていきたいと思っています。



高木先生◆現在6年生の担任です。「中学校では運動部に入ろう」「体力づくりに励むぞ」「運動すると心も体もスッキリするな」など、子どもたちが将来、豊かなスポーツライフを実現できるように、全力を尽くします。



松田先生◆暑い夏が終わりましたが、この夏休み、土日を含めて1日しか休みがとれませんでした。最近では、宝くじが当たったとして…とか、高校生に戻れたとして…など、移動時間などに「空想遊び」に浸っています。



鈴木先生◆4月から大学教員として再出発しました。人生4度目の異動ですが、新しい環境に慣れるまでは右往左往です。対象が小学生から大学生に変わっても、「授業を創る」という営みは面白いことに変わりないと体感しています。



福島先生◆この夏はロンドンオリンピックを見ることにたくさんの時間を使いました。8時間の時差はとてもきつかったのですが、日本チームの活躍に感動し、スポーツを通して育む絆の大切さをあらためて感じました。



美越先生◆東京都小学校体育研究会の体づくり運動領域部会で学ばせていただいています。来年度の全国学校体育研究大会東京大会に向け、日々研究に励んでいます。興味のある方は、一緒に勉強しましょう。

体育の授業に

ICTの導入を



水島 宏一

2 020年までに全国の小中学校にデジタル教科書を普及させるために、現在、文部科学省と総務省が連携をとってデジタル教科書に関する事業を行っています。文部科学省は「学びのイノベーション事業」で情報通信技術活用実証研究として、主にソフトやヒューマン、教育面を検証し、総務省は「フューチャースクール推進事業」でICTを活用した協働教育の推進に関する調査研究として、主にハード、インフラ、情報通信技術を検証しています。これらの研究はいずれも学校教育に関わることを多面的に検証するものです。しかし、文部科学省が検証するソフトは国語、算数、外国語活動といった、現在、主に教科書のある教科のデジタルコンテンツについてのものです¹⁾。つまり、体育実技に関しては、検証されていません。では、どうすれば体育にICT教育が導入されるのか、ということを考えると、まずは、体育実技に関するデジタル教科書やICT教育に関する教材の必要性を教育現場から訴えていくということが必要ではないでしょうか。

体育実技の授業においてデジタルカメラやデジタルビデオ、DVDといったICTを活用したときの効果を、先生方はご存じのことと思います。しかし、教育現場にはそうした授業がなかなか浸透しません。それはなぜなのでしょう。現在、私はICT活用（携帯型端末機器及びデジタルコンテンツ）に関する研究を進めていますが、この研究でICT活用のメリットとデメリットについてアンケート調査したところ、次のような回答を得ました。

まずメリットとしては、「子どもたちの意欲向上につながる」、「学習者自身の動きを見ることで課題が明確にな

る」、「自分では実演できない見本の動きを見せられるので役に立つ」、「正しい動きが理解できる」、「技のイメージづくりに役立つ」など、子どもたちの学習活動に関わることがあげられました。一方でデメリットとしては「機器が高価である」、「機器の操作がわかりにくい」、「準備に時間がかかる」、「学校によって設備の差がある」、「単元内での機器の活用のしかたがわからない」、「機器の操作に集中して子どもたちの指導ができない」など、機器に関する不満があげられました。

先生方のような状況の中で現在、デジタル機器はめまぐるしく発展し、小型化、低価格化が進んでいます。それにより、デメリットとしてあげられたことが徐々に解決されつつあります。あとは、メリットにあげられた子どもたちの学習活動のためにも、機器の操作やICT機器の活用方法、デジタルコンテンツの内容などICT活用時の授業運営および教材内容の検証を行い、教員全員がICT機器を活用して授業が実施できる効果的な授業運営方法を明らかにすることが必要でしょう。そのためには、教育現場の先生方が協力してICTを活用する場合のガイドラインを少しでも早く導き出すことが大切です。そうすることで、「体育におけるICT教育の可能性」が大きくなることにつながるのではないのでしょうか。

1) 文部科学省：教育の情報化ビジョン(案)
<http://jukugi.mext.go.jp/archive/517.pdf>

みずしま・こういち 1965年大阪府生まれ。関西高校から日本大学、同大大学院を経て大和銀行に入行。日本大学大学院所属時の1988年、ソウルオリンピックに出場し、男子団体総合銅メダルを獲得。1994年に現役を引退。現在は東京学芸大学教育学部准教授。専門は運動学。『体育の学習』編集委員。

からだで生きる

—モンゴルの少女が教えてくれること—



夏のわたしの仕事

馬乳酒づくりはわたしの仕事——13歳のアマルザヤは言う。モンゴル国の首都ウランバートルから100kmほど離れたバツスンベル村に住む遊牧民の女の子は、そう言って皮の袋に馬乳を注いだ。それを棒で四六時中攪拌すると発酵し、非常に弱いアルコール性の飲料ができる(写真1)。これを馬乳酒と呼び、モンゴルの人々にとって夏にはなくてはならない飲み物となる。日本語では「酒」とは書くが、どちらかというと薬に近い健康飲料といった趣で、大人だけでなく子どもも大量に飲む。

モンゴルでは夏を「白い食べ物」の季節と呼び、馬乳酒をはじめとする乳製品を中心に食事をとる。逆に冬は「赤い食べ物」すなわち家畜の肉を食べ、気温マイナス40度にもなる厳しく長い冬を乗り切る。牧畜の1年のサイクルに合わせて季節ごとに食べ物を変化させるモンゴルであるが、今日は特別である。明日にはナーダムと呼ばれる1年に一度の祭(相撲、競馬、弓射の三種の競技の祭)があるため、朝からお父さんが家畜の中から羊を1頭選び屠った。ナーダムならではの特別のごちそうだ。その肉をゆでたり、残りを干し肉にしたりと今日は忙しい1日だった。

アマルザヤの家族は羊、山羊、牛、馬を飼う遊牧民。モンゴル語で「ゲル」と呼ばれる移動式天幕に住み、季節ごとに家畜とともに移動しながら牧畜を営んでいる(写真2)。「もうひとつの大切なわたしの仕事は、朝4時ごろに起きてする牛や馬たちの乳搾り。少し昼寝をした後、昼と夕方には山羊の乳を搾るの。馬は1日に何度も搾るのよ」。そうしてアマルザヤは馬乳を搾りに外へ出ていくのである。毎朝早くに群れの中から仔馬を捕まえ、縄でつないでおく。そうすると母馬はわざわざ捕まえなくても仔馬から離れることがなく、ゲルの近くに留まっている。一度に搾れる乳の量

が少ないため1日に何度も搾乳する必要のある馬は、こうすることで搾乳がしやすくなる。まず仔馬に乳をしばらく吸わせて乳の出を促進させてから仔馬を引き離し、その後を人間が頂くのである。

モンゴルでは夏休みが5月末から始まって9月まで授業がない。新学期が始まると、村に唯一ある学校に通うため、村の中心部に定住するお婆さんの家に居候する。だから、両親の住むゲルには休みの間だけ帰ることができるのだ。彼女は4人姉妹の長女で、お母さんは5人目を身籠っており来月には弟妹が生まれてくる。身重のお母さんに代わって、アマルザヤは牧畜作業から妹たちの世話まで本当によく働く。

からだを動かすことが生きること

アマルザヤはからだでわかっているだろう。働くということは何よりからだを動かすということ、そしてからだを動かすことで食べ物を獲得するというを。その食べ物はつい今しがたまで世話をしてきた、身近に存在していた命。その命を頂くことで滋味がからだに染み込み、空腹が心地よく満たされていく。こうして他の命がわたしの生きる糧になり、からだを造り、からだを動かす力となる。この「深い命のやりとり」のおかげでまた今朝も早くから家畜の世話をすることができるのだ。からだを動かし食物を得て、それがまたからだを造る——そのサイクルが絶えることなく繰り返されることこそがわたしを生かしている。

実はこれはモンゴルの人々にだけいえることではなく、いうなればすべての人間に当てはまる生の根源にかかわる論理のはずである。しかしそのことを我々がいかに忘れてしまっているか、それをモンゴルの少女が教えてくれる。少女の暮らしは、人の生のサイクルにからだと命がしっかりと位置づいている。わたしは身体的存在そのものな



左【写真1】馬乳酒をつくるアマルザヤ

上【写真2】夏のモンゴルの景色

のだ。からだは「持つ」ものではなく、わたしが「からだである」。これが生きているということ、からだに命が重なり合うということだろう。

実は昔から伝承されてきた伝統的な（広義の）スポーツも、我々が身体的存在であることを確認する機会でもあった。日本各地の神社で伝承される神事相撲はもちろんのこと、大きな米俵や鏡餅を持ち上げて走るものや石担ぎの儀礼は、現在でも続く伝統スポーツである。大きな力、素早い身のこなし、安定した足腰の動き……。伝統スポーツが提示するこれらの動きは、かつての我々の生業が必要としていた、自分と共同体が生きるために不可欠なからだの集大成だった。大きな石を担げて一人前。その一人前の労働力が家族の食物獲得を約束し、共同体を支えその命運を大きく左右する。そのからだを神々に提示し共同体で確認し合う、伝統スポーツはそういう機会であったのだ。モンゴル相撲が今でも生き生きと当該文化で光彩を放ち、力士への信頼と憧れが未だ健在なのはそうした背景があるからだだろう。力士のからだは人々を生かす源であるということが、しっかり文化の中に位置づいているのだろう。

「からだで生きる」ことを想起する体育

大きな石を持ち上げる意味を見出しにくくなってしまった我々の社会では、ときに自分が「からだで生きる」存在だということを忘れてしまう。とはいえ身体に無関心になったのではない。それどころか自分の身体を対象化し人と比較して、自らの身体をデザインすること（ときにそれは過剰な形で身体を浸蝕しさえする）にかけては大人も子どもも非常に熱心である。ただここでいう身体は客観的に対象化され、わたしが「持つ」「管理

する」身体にはかならない。身体をあたかもモノのごとくに「持つ」ことと、わたしは「からだである」ということには根本的な違いがある。

身体を「管理」し「持つ」ことから離れ、自らが身体的存在であることを「からだで学ぶ」ことができるのはほかならない体育の役割だと思う。からだを動かすことによって観念で凝り固まった身体がほどけ、運動の楽しさに浸り込んでいくような感覚。言葉でのコミュニケーションとは異なる、友のからだと共振する快樂。どうしても上手に運動できない場面でさえ、子どもたちはからだが自分の思いのままに「管理」しきれないものだということを学ぶだろう。それらがすべて「からだで生きる」ということだ。

「からだで生きる」——モンゴルの少女がそうであるように、生きるという道筋にしっかりとからだが位置づき、からだには命が深く宿っている。その脈打つからだを生きることができて、初めて他人のからだに起こる感覚を生々しく想像することもできよう。言葉にならないものを感じ受けることは、からだにしかできないことだ。しかもそれは決してモノとしての身体ではなく、生と同義であるからだによってのみである。いじめを受ける友のからだに湧き上がる、言葉にならない悲鳴に共振できるのは、命を宿すからだで生きるわたしでしかない。

友のからだにまさに起こっていることを、自分のことのように感受できること。それはモンゴルの社会とは形は違うけれども、我々の社会にとっての「からだを通じた深い命のやりとり」なのかもしれない。今、我々の社会において求められている体育とは、「からだで生きる」ことを基盤とした命のやりとりのレッスンなのかもしれない。

空手の教材化の試み

沖縄県豊見城市立上田小学校教諭 長嶺 文士郎

1. 空手を体育の教材に取り入れた動機

私は沖縄の伝統空手の三大流派のひとつである松林流・長嶺空手道場の三代目として生まれました。現在も小学校で教鞭をとるかたわら、日々稽古に励んでいます。沖縄が世界に誇る伝統文化のひとつである空手が、体育の教材として、子どもの健全な心と体を育む一助になればこんなにうれしいことはありません。空手を通して体を鍛え、技を磨くだけでなく、本当に大切なのは心だということを考えてもらいたい、そんな思いで空手の教材化を図ってみました。

2. 空手の教材としての有効性

体育の教材として、空手は以下の点で有効であると考えます。(参考：沖縄県教育委員会『空手道指導の手引』)

- ①郷土の伝統文化であること。
- ②道具や場所の制限が少なく、手軽に行える運動であること。
- ③礼節を重んじる点が、精神面の発達につながる点。
- ④日常的に行わない動きが多く、体操的なよさがある点。
- ⑤個人の体力に応じて行いやすい運動であること。
- ⑥競技空手の要素を取り入れた場合、「組み手」「型」の試合形式で相手に勝つ楽しさを追求できること。
- ⑦伝統空手の要素を取り入れた場合、「技の研究」を通して武の真髄を追求する楽しさを、「鍛練」を通して自分に克つ楽しさを追求できること。

3. 空手の教材としての課題

一方、空手を教材化するにあたっては、以下の難しさもあります。

①安全面への配慮

体育では安全面への配慮は必要不可欠なもので

すが、特に空手は相手を倒すための動作が含まれているため、他のどの単元よりも安全面に配慮した指導が求められます。授業中だけでなく、ケカに悪用したり、いじめや暴力につながったりしないように徹底した配慮が必要になります。

②学習指導要領への位置づけ

空手を、小学校体育の高学年「体づくり運動」領域の「体力を高める運動」に位置づけます。空手の技や鍛練などから精選した運動を、主に「柔らかさ」「巧みさ」「力強さ」を高める運動として取り扱うことにします。「動きを持続する力」だけは、持久走などで別の単元で補うことにしました。

③空手の内容の取捨選択

沖縄の伝統空手といっても、流派もたくさんありますし、ひとつの流派の中にも型がたくさんあります。現場の先生がいちばん頭を悩ませるところかもしれません。本研究では、松林流の開祖・長嶺将真(私の祖父です)が1941年に初心者向けに開発した「普及型Ⅰ」の型の一部や、「中段突き」「中段受け」の技、その他「柔軟運動」や「鍛練」などから基本中の基本の動作を取り上げ、体力を高める運動のねらいに沿うように教材化をしていくことにしました。

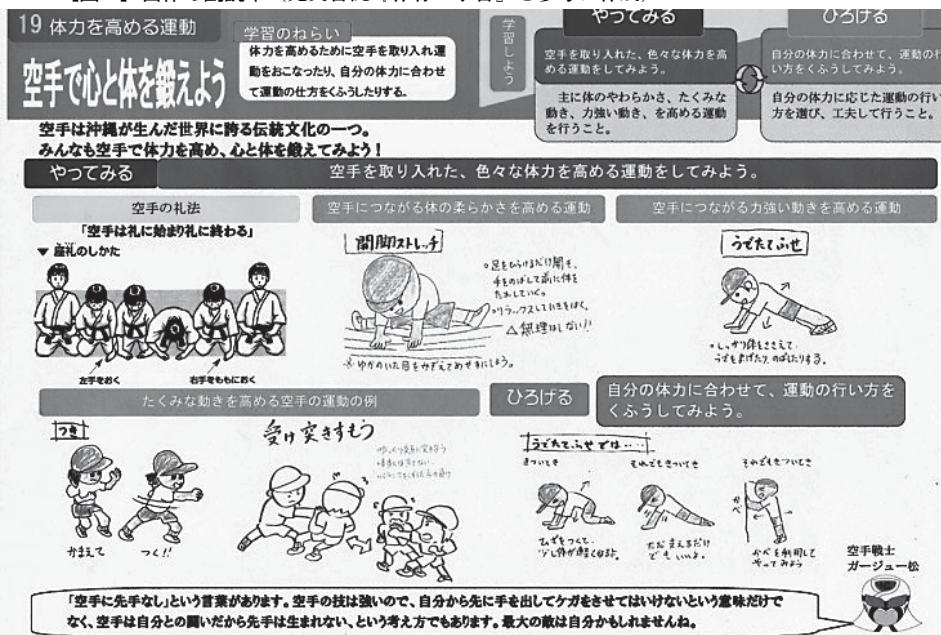
4. 教材の開発

(1)自作の副読本

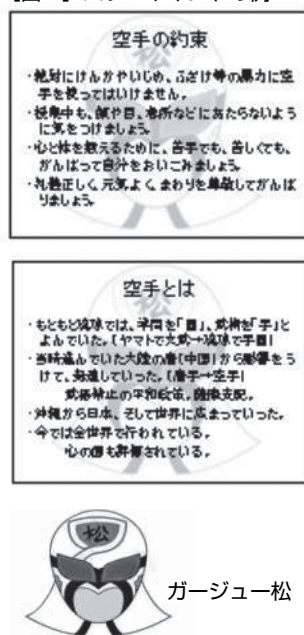
前述の伝統的な空手の基本動作をもとに、5年生向けの「体力を高める運動」の教材を開発し、それを自作の副読本として光文書院の『体育の学習』のようにまとめてみました(図1)。

この自作の副読本を用いることで、ふだんの体育のように授業を行うことができると考えました。道場での空手の稽古をそのままやるのではなく、あくまで体育の「体力を高める運動」の授業として行うところに、体育人としてのプライドを込めたつもりです。この副読本を活用すれば、実際に

【図1】自作の副読本（光文書院『体育の学習』を参考に作成）



【図2】パワーポイントの例



空手の経験がない先生でもある程度指導できるものと思います。

(2)空手の運動教材

①礼法→心を育むために

武道には「礼に始まり礼に終わる」という言葉があり、空手も例外ではありません。相手やその場を敬う気持ちを大切にすることを礼法で表現させることで、児童の心を育てていくことにつながっていきたくと考えています。

②柔軟運動→柔らかさを高めるために

空手では、練習の初めには体をほぐす柔軟運動を行うのが一般的です。その中から、下半身から背中にかけての大きな部分の柔らかさを高める「開脚ストレッチ」を行うことにします。

③「中段突き」「中段受け」→巧みさを高めるために

拳で相手を打つ「突き」や、手刀で受ける「受け」は、空手を代表する動作のひとつです。これらの動作を繰り返し行うことにより、児童は巧みさを高めるとともに、空手の深い真髄の一端にふれることができると考えます。

④鍛練→力強さを高めるために

空手の稽古では、終盤に体を鍛える鍛練を行うことがよくあります。その中から、主に腕や背筋の力強さを高め、「突き」につながる「腕立て伏せ」を行うことにします。

(3)場の工夫

①体力の高まりを実感させる工夫……開脚ストレッチの場の工夫として、体育館の床にテープで120°ラインを引き、板目を数えさせることで、

足の開きや体の前傾の目安となるようにしました。

また「中段突き」の場として、体育館の壁にマットを2枚重ねて固定し、実際に突きを当てて練習ができるようにし、「中段突き」の重さを実感するある程度の目安としました。

②励ましながら運動できる学習形態……空手と同じ動作を繰り返したり、きつい鍛練を行ったりすることがよくあります。そのため、とすれば運動に飽きたり、嫌気がさしたりする可能性があります。そこで学習形態を工夫し、男女でペアを組んだり、互いの顔を見合ったり、声をかけ合ったりして楽しい気持ちで運動に取り組ませるようにしました。

③自己の体力に応じた運動の行い方を選択させる工夫……これまで私が行ってきた体力を高める運動では、自分の高めたい体力に合わせて運動を選択する場面がありました。しかし本研究では、「腕立て伏せ30回」を全員必修の課題とし、体力に応じてその行い方を選択させることにしました。

自分の体力と相談しながら行うこの場を、「ひろげる」の学習過程に位置づけ、思考・判断の評価の場としました。

(4)教具の工夫

①パワーポイントの活用……オリエンテーションにおいて、パワーポイントを活用し、体力を高める運動のねらいや空手についての知識、学習の流れ、安全面の注意等を確認しました(図2)。限られた時間の中で、効率よく理解を深め、単元の見通しをもたせました。



〔写真1〕空手体操の最初は「礼法」



〔写真3〕中段突き



〔写真5〕中段突きでマット打ち



〔写真2〕開脚ストレッチ



〔写真4〕2人1組で中段突きと中段受け



〔写真6〕2人1組で「受け突きすもう」

②音声教材「空手体操」の活用……礼法，柔軟運動，中段突き，中段受けの運動をする際の，教師の指導のかけ声をあらかじめ録音し，さらに音楽を合わせた音声教材「空手体操」を開発しました。この空手体操を活用すれば，一定の時間で空手の基本の運動を行うことができますし，空手の経験がない先生でもある程度の教材研究で指導が可能になると考えます。

③帯の代わりにゴムバンドを用いる工夫……空手では，帯の色でその人の段位を表すことが一般的です。最初は白帯から始まり，最後は黒帯になります。本単元では，帯の代わりに100円ショップで買ってきたゴムバンドを活用することにしました。各時間のねらいを達成した児童には，白→茶→黒の順でゴムバンドを授与します。児童にとっては次の色をめざすモチベーションになり，教師にとっては評価の目安になります。また帯は単にその人の段位を表すだけでなく，稽古に入る前にビシッと締めることで気持ちを切り替えるスイッチの役割もあります。児童にも，ゴムバンドをすることで空手の世界に入り，授業後ゴムバンドを外したら空手の技を悪ふざけなどに用いることのないように声かけをしていきます。

(5)その他の工夫

①マスコットキャラクターの設定……空手戦士「ガージュー松」（ガージューは沖縄の方言で強い，がんこな，頑強なという意味）は，上田っ子の心と体を育むことをめざす正体不明のマスクマンです。たまに出てきて授業を盛り上げます。盛り上がりすぎに注意が必要です（笑）。

②道徳の授業との関連……空手の単元前に，道徳

で自作資料「世界に広がる沖縄の空手・沖縄の心」を用いて郷土愛の価値観を追求する授業を行いました。体だけでなく，心も育むということをねらっています。

5. 授業の流れと児童の様子（上段写真参照）

- ①集合 本時のねらいの確認
- ②空手体操：「礼法」→「開脚ストレッチ」→「中段突き」（写真1～3）
- ③2人1組で「中段突き」と「中段受け」：突くほうはゆっくりと中心をねらって突き，受けるほうはなるべくぎりぎりを受け流す。（写真4）
- ④「中段突き」でマット打ち（写真5）
- ⑤2人1組でゲーム「受け突きすもう」（写真6～10）
- ⑥「鍛練」の腕立て伏せ（写真11）

6. 子どもたちの感想

- ・ほくは空手をはじめてやったけど，とても楽しかったです。ほくはこの授業でとても心と体が強くなったと思います。黒帯をもらってうれしかったです。
- ・今日は「中段突き」が，はじめてやったときより強くなっていました。先生が「力を抜いて突いてごらん」と言ったので，そうすると逆に強くなりました。腰や足，地面とつながるともったいそうです。
- ・今日の「受け突きすもう」では，男子に勝ったのでうれしかったです。相手が強く突いてきたのでこしを落として大きく引いて受けたら相手が自分でくずれました。



〔写真11〕自分の体力に合わせよう！
「僕はレベル1。壁で腕立てするよ」
「私はレベル5。30回めざすわ！」

〔写真7～10〕受け突きすもう。トーナメント優勝者は、ガージュー松と対戦だ！

- ・昨日やった腕立て伏せのせいか、わきや背中が痛かったです。うれしかったのが開脚ストレッチで、思い切り体をかたむけたら初めて頭が床につきました。
- ・最初音楽に合わせて柔軟をしたら、私は、体がとってもかたいので板7枚でした。だけど、最後の授業では9枚になっていました。
- ・私は昨日腕立て伏せが20回しかできなかったけど、今日は最後までできました。最後らへんはもう腕がブルブルしてきつかったけど、なんとかできました。本当によかったです。これから家でも続けたいです。

7. 授業研究会で参観いただいた先生方の声

- ・斬新な取り組みだと思う。女子ものっていたのですごいと思う。
- ・40名全員に目を行き届かせるためには、「受け突きすもう」の場を工夫する必要がある。
- ・体幹トレーニングになる運動があった。
- ・突きのマットには、打つ目印があってもよかったと思う。
- ・マットの硬さは妥当か。セーフティーマットでもいいかもしれない。
- ・「受け突きすもう」では、団体戦を行う、審判をつける、ポイント制にするなど、ゲームとしての工夫をもっとしてもおもしろいかもしれない。
- ・いろいろな資料がよかった。自作の副読本や導入のパワーポイント、音声教材、道徳の授業との関連など。
- ・開脚ストレッチのラインがとってもいい。長座体前屈につながるのではないかな。

- ・腕に巻いたゴムバンドは、いつ昇段するのか。（A：合間の時間にやっていました）
- ・剣道経験者だが、授業の中でもっと「礼」の場面があってもよい。
- ・指導案がよくできているので、3時間ではもったいない。

8. おわりに

まだまだ課題が多い研究ですが、そのぶん夢も広がります。今後の夢は以下の通りです。

①「ラジオ空手」を開発したい！

日本の小学校を卒業したほとんどの児童がラジオ体操をすることができるように、沖縄の小学校を卒業したほとんどの児童が空手の普及型Ⅰができる、空手の経験がない教師でも指導ができる、そんな夢のような音声教材の開発をめざします。

②空手の普及を図りたい！

ラジオ空手をもとに、空手の小学校体育への普及に尽力します！ 研究授業や夏休みの朝など、県内各地でがんばります！

③空手を沖縄の早朝の定番にしたい！

中国の早朝の公園では太極拳が盛んなように、沖縄の早朝の定番になったらいいと思います。

④沖縄県の運動の二極化傾向をなくしたい！

部活をしている子も、そうでない子も、みんな無理なく取り組み、運動に親しむ子が増えます。

⑤沖縄の児童をみんな強く優しくしたい！

そんな夢がかなうように、これからも空手の研究と実践を図っていきたいです。

（ながみね・ぶんしろう）

新教育課程において求められる 授業実践の研究

—わかる・できる・たのしい授業をめざして—

神奈川県横須賀市立鷹取小学校教諭
澤口 琢

神奈川県横須賀市立野比東小学校教諭
島田 忠昭

はじめに

横須賀市教育課程（小学校体育部会）研究員会では、「新教育課程において求められる授業実践を調査研究する」をテーマに3年間の研究を行った。

研究1年目は、学習指導要領解説新旧対照表を作成し、新学習指導要領のねらいや内容に対する理解を深めた。2年目には、単元計画構造図集を作成し、新学習指導要領の趣旨をふまえた単元計画のあり方を示すとともに、指導内容の一層の明確化を図った。そして3年目は、これまでの研究の検証をふまえ、小学校段階における学びの系統性も重視しながら授業実践を行った。研究実践内容は、研究発表会等を通し市内各校に情報発信をし、体育研究会および体育科指導の指針となっている。本稿では、3年目に行った授業実践を中心に報告する。

1. 研究の実際

(1) 単元名

『とんで！ のって！ とび箱遊び』

（「器械・器具を使つての運動遊び」の「とび箱を使った運動遊び」）

(2) 対象児童

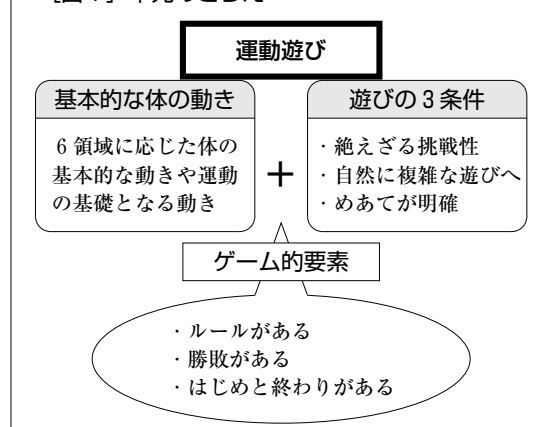
第2学年34名（男子17名・女子17名）

(3) 単元のとらえ（図1参照）

低学年では、運動遊びという表現を用いるが、各種の運動を通じて体の基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身につけることが求められている。

本実践では運動遊びを「運動（基本的な体の動き）」＋「遊びの3条件」ととらえ、すべての活動において、できるだけこの条件を盛り込むよう心がけた。また、運動遊びにゲーム的要素を加えることで、児童が学習に対してさらに夢中になれるよう活動を工夫した。

【図1】単元のとらえ



(4) 学習の道筋

とび箱を使った運動遊びに楽しく取り組みつつ、確実に学習内容を身につけることを期待し、学習の道筋（図2）を設定した。

「はじめ」では、とび箱を使った運動遊びのねらいと内容、学習の道筋を理解し、学習の進め方に見通しをもつことをねらいとしたオリエンテーションを行う。

単元を通しては、準備運動を基礎学習とし、主運動につながる感覚づくり・感覚遊びに取り組む。

「ステップ1」の基本学習Ⅰ【習得学習】では、とび箱を使った運動遊びに取り組み、基本的な動きを身につけること、よい動き方を知ることがねらう。

「ステップ2」の基本学習Ⅱ【活用学習】では、さまざまなとび箱や場で、いろいろなとび方に挑戦することで基本的な動きの質の高まりをねらう。

「ステップ3」の発展学習では、身につけた基本的な動きをもとに、より高度な動きに挑戦することで次学年の学習へのスムーズな移行をねらう。

「まとめ」では、できるようになった動きを確認する発表会を行い、単元の振り返りとする。

【図2】学習の道筋

	1	2	3	4	5	6	7 (時)
0 ～ 45 (分)	はじめ	共通メニュー ・場の準備／学習やめあての確認 ■感覚づくり (写真①～③) ■主運動につながる感覚遊び【基礎学習】 (写真④～⑦)					
		ステップ1 ○基本学習Ⅰ【習得学習】 ■基本的な動きを身につける運動遊び (写真⑧～⑪) ■ゲーム的な要素を含む運動遊び (写真⑫・⑬)		ステップ2 ○基本学習Ⅱ【活用学習】 ■チャレンジ運動遊び (写真⑭～⑰)		ステップ3 ○発展学習 まとめ ○発表会 ○振り返り	
		共通メニュー ・学習内容やめあての振り返り／学習カードの記入／場の片づけ					

(5)学習内容を身につけるための手立て—教材

共通メニュー

■感覚づくり…器械・器具を使った運動遊び (器械運動) に必要な基礎感覚を養う。

①逆ブリッジ (ゆりかご)



②ブリッジ (片足上げ)



③首倒立



■主運動につながる感覚遊び…とび箱を使った運動遊び (とび箱運動) に必要な感覚や動きを養う。

④馬とびタイムアタック…
腕を支点とした体重移動



⑤壁逆立ちジャンケン…
腕支持・逆さ感覚



⑥うさぎとびジャンケン…
投げ出し感覚・運動の連続



⑦せーの！でジャンプ…
安全な着地



ステップ1

■基本的な動きを身につける運動遊び…基本的な動きの習得をめざすとともに、よい動き方を知る。

⑧両足踏みきりとび上がりおり



⑨片足踏みきりとび上がりおり



⑩両手とび上がりおり



⑪またぎ越しおり



■ゲーム的要素を含む運動遊び…基本的な動きの習得（定着）をめざす。

ステップ1

⑫とび箱フルーツバスケット…
片足・両足踏みきりとび上がりおり



⑬とび箱またぎジャンケン陣取り…
腕を支点としての体重移動



ステップ2

■チャレンジ運動遊び…基本的な動きの質の高まりをめざす。

⑭ステージとび上がり



⑮スーパーマンジャンプ



⑯連結とび箱またぎ乗りおり



⑰連結とび箱またぎ渡りおり



(6)学習内容を身につけるための手立て—視覚

低学年の児童にとって行い方や動き方、動きのポイントなどがイメージしやすいように、言葉がけに加え、イラストや写真などを活用しながら運動に取り組ませる。

【第2時～第4時】

それぞれの動きや、それらのよい動き方について、言葉やイラスト、写真を使い、全体で学習をする。



〇〇さんは、両足で強く踏みきっている。

おしりが高く上がっているよ。

とび箱の前で止まらないで踏みきると勢いがつくね。

ひざを曲げて着地すると、ちゃんと止まれそうだね。



【第5時～第7時】

さらに動き方やポイントについて、児童の発した言葉を使つての説明書きや写真なども加え、授業中にいつでも見ることができるように掲示しておく。

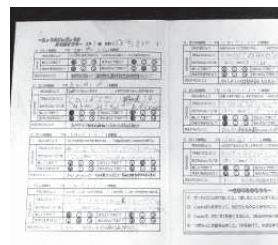
この前のように、両足で踏みきるといいね。

両手をしっかりと開いて、とび箱に着くといいんだね。

(7)学習内容を身につけるための手立て—言語

言語を使えることは、技能に対する理解を深めるとともに、人間関係の育成にとって、とても重要であることから、低学年段階から見合い、伝え合う活動を取り入れる。

とび終わったあと、次の人に手をあげて大きな声で「ハイ！」と合図を出し、次の人の演技を見る。そして、見たことや感じたことを伝える。最初は「上手だったよ」「すごかったよ」と感想を伝え、徐々に「高くとべていたよ」「両足がそろっていたよ」と具体的な動きについて伝えることができるようにしていく。

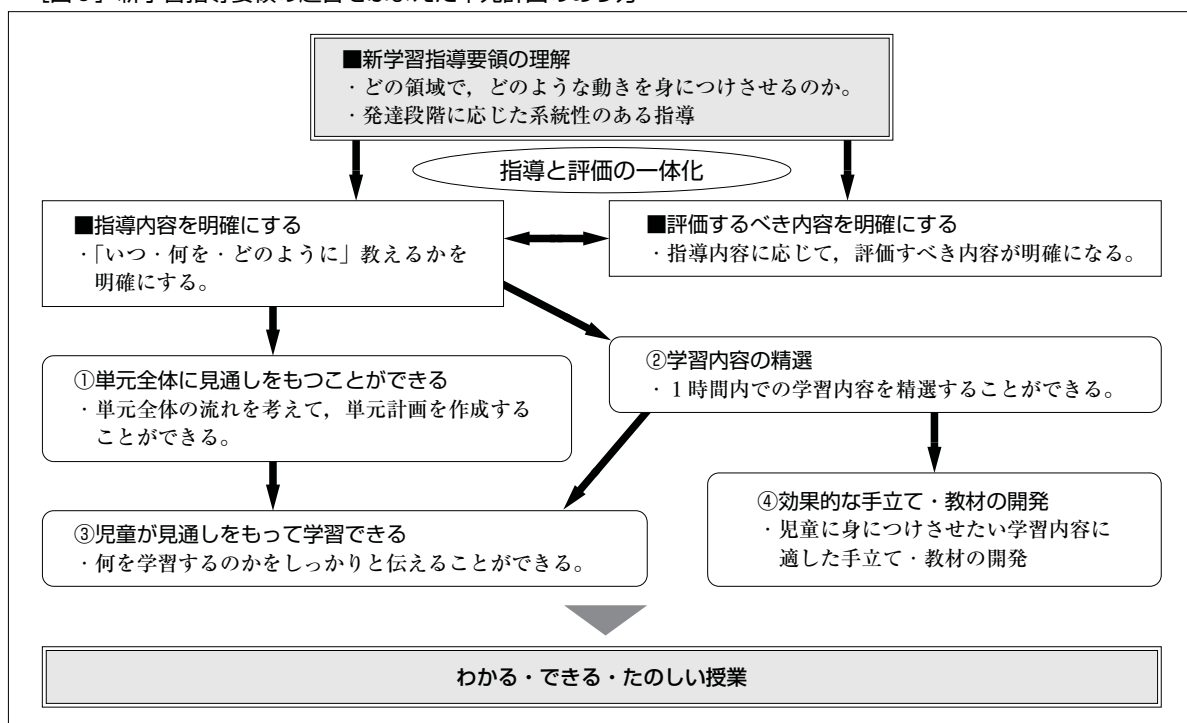


学習カード欄に「友達のよい動き」を記入する欄を毎時間ごとに設け、よい動きをしていた人の名前と、どんなよい動きだったかを記入する。

ともだちの よいうごき

() さん ()

〔図3〕新学習指導要領の趣旨をふまえた単元計画のあり方



2. 研究の考察

(1) 成果

3年間の研究および授業実践を通して、単元計画のあり方について図3のようにまとめた。指導内容を明確にすることで、単元全体に見通しをもつことができ、学習内容を精選することができた。そうすることで、児童の実態に即した効果的な手立て・教材の開発につながった。

今回の授業実践では、前述したような学習の道筋をたどっていったことで、基礎的な感覚が十分に養われ、基本的な動きを習得、活用し、発展的な学習へとつなげることができた。

また、ねらう動きを明確にした教材をそれぞれの学習に設定したことは、とても効果的であった。運動遊びにゲーム的要素を加えたことは、楽しみながら学習内容を身につけることにつながった。

さらに、低学年段階から基本的な学び方をしっかりと身につけさせることは、中学年以降の体育学習のスムーズな展開につながると考えられる。

本単元開始当初は、踏みきり前で止まってしまう児童や自分の体を支えられない児童が多くいたが、授業を重ね、単元終了時にはすべての児童がとび乗りやとびおり、またぎ乗りなどの基本的な動きを身につけることができた。

(2) 課題

新学習指導要領の低学年のとび箱を使った運動遊びには「回転する動き」や「またぎ越す動き」は示されていないものの、本学級2年生児童の実態を考えたとき、それぞれの動きも発展的な内容として扱ってもよいのではないかと考えた。それぞれの学年で身につけるべき学習内容をしっかりと習得させ、他領域とのバランスを考えながら単元計画や年間指導計画を作成していくことが重要だと感じた。

また、ゲーム的要素を含む運動遊びは、児童にとってはとても楽しいものであるが、動きが雑になったり、ねらいとした動きが出にくかったりということもあった。学習内容を身につけるための教材が児童にとって、楽しいと感じる運動遊びになっているか、基本的な動き方を身につけたり、高めたりする運動遊びになっているかを考え、工夫していく必要がある。

(さわぐち・たく／しまだ・ただあき)

【参考文献】

- ・『小学校学習指導要領解説体育編』（文部科学省）
- ・『小学校学習指導要領の解説と展開体育編』安彦忠彦監修（教育出版）
- ・『器械運動の授業づくり』高橋健夫・三木四郎・長野淳次郎・三上肇編著（大修館書店）
- ・『体育科教育』別冊「新しい跳び箱運動の授業づくり」高橋健夫・藤井喜一・松本格之祐編著（大修館書店）
- ・平成21年度県立体育センター研究報告書『体育学習における技能の系統に関する研究』（神奈川県立体育センター）



「女子スポーツ」という新大陸

ジャーナリスト 岡崎 満義

4人の女性アスリート

豪華絢爛、熱狂の祭典ロンドン五輪が終わった。熱帯夜、午前3時、ときには5時過ぎまでテレビ観戦、寝不足の日が続いた。やっぱりスポーツは面白い。どんなスポーツにもひきこまれる。特に、ふだん滅多に見られないマイナー・スポーツがオリンピックではふんだんに見られるのがうれしい。

3度目の五輪でみごと銀メダルを手にした三宅宏実の重量挙げなどもそうだ。何秒間か重い鉄輪のバーベルを差し上げるだけの単純な競技だが、控室から競技場に出て瞑目、やおらしゃがんでバーベルに両手をかける。恐ろしいほどの緊張感が走る。一気にバーベルを肩まで引き上げる。顔は紅潮し、脚は震える。一呼吸おいてさらに頭上へ差し上げる。ふらつく脚をこらえて10数秒、OKのランプがついてバーベルは足元に放りだされる。見ているこちらまで全身に力が入る。

寄拳重三宅宏実選手 重量挙げの三宅宏実選手に寄す
 静閑決皆鉄輪前 静かにマナジリを決す鉄輪の前
 脚震頬膨高拳全 脚はふるえ頬ふくらみ高く挙げてまったし
 忽見瞬間歓喜汗 たちまち見る瞬間歓喜の汗
 破顔少女聳双肩 破顔の少女 双肩をそびやかす

「北京が終わって1000日以上、1日で人生が決まると思うと緊張しました」。「たくさん涙を流してきました。3回目の五輪で花を咲かせることができました。何よりも父よりひとつ上で、うれしいです。今日という日がずっと待っていたんだと思う。苦勞をかけばなしだったけど、父はずっと『奇跡を信じろ』と励ましてくれた。恩返しできたんじゃないかな」と、三宅選手が言えば、父義行は、

「付き合いが古くなればなるほど、正しい言葉を使わないと信頼関係がなくなる。言葉も3度のオリンピックでは違ってくるんです。1度目は『これやれよ、大丈夫だよ』。選手は半信半疑ですよ

ね。それが、3度目になると『これやれよ』と言っても過去2回の実績があるから、信じないんですよ。だから本音でいかないと。ごまかしがきかない。言葉って非常に大事ですね。私たちは1人の選手だけじゃなくて、子どもが選手を終えて、どう成長していくかも考えて指導している。ここは言っちゃあだめ、ここは自分で切り開かなくちゃ、次につながらない。苦しいだろうけど、ここはほっとけ、と。自分でやってほしいってところがあるんですよ。そこは言わない」(2人の談話は「日刊スポーツ」7月30日付による)

父親であると同時に、経験豊富な重量挙げの大先輩であり、ほとんど心理学者か精神科医のような存在に見えてくる。

レスリング女子63キロ級でオリンピック3連覇を果たした伊調馨もそうだ。試合の3日前の練習で「3本あるじん帯の1本半が切れた」状態で、痛み止めの注射を打ちながらの試合で、危なげなく金メダルを取った。恐るべき心技体である。昨年の世界選手権でも鼻骨を折りながら優勝している。まさに満身創痍の選手生活、もはや目標はすべて達したのだから、次の生活を考える、となるのではないか、と思うのだが、そうではなさそう。

伊調は姉千春がレスリングをやめて高校教諭になったあと、東京都内で1人暮らしを始め、自衛隊や男子代表の合宿に参加して、女子のレベルの低さを痛感したという。男子レスリングの技は、はるかに多彩なものだった。

「自分が男だったら、もっと楽しいのかなと。女であることが悔しかった」という。

五輪3連覇が目標ではなく、学んだ新しい技を試合で出しきりたい、自分の可能性をさらに押広げたい。金メダルが最終到着地点ではなく、さらにその先に新しい視野が拓け、新しい自分と出会える喜びに向かって進んでいるように見える。

最近読んだ秋山訓子「世界一の女性総合格闘家—女性がアスリートであること」(「世界」9月号)も、女性のトップアスリートの心技体の可能性にふれていて、大変面白い読み物だった。女性にも総合格闘家がいるとは初めて知ったが、30歳を超えてから始めた総合格闘家・藤井恵は、38歳の今、こんな言葉で自らを語っている。

「試合中に、相手がスローモーションで動いているのみに見えるんです。くっきり、皮膚の毛穴までくっきりと見える。次にどう来るかもわかるから、技も自在にかけられる。こんなことを経験させてくれた総合格闘技には、本当に感謝してます」
「今のこの状態(最近判定負けしてランキングが下がった)から、どうやって、試合をするような状態に自分を持っていけるのか。未知のものを知りたい、っていう気持ちがあります。それを知るときの感動、楽しさ、驚きを知ることが、生きていることの価値かな、って思う」と話す。伊調馨と同一線上を歩いている。

このようなずば抜けたトップアスリートでなくても、同じ方向に目線が向いていると思わせられる例がある。「婦人公論」8月22日号に載った「オリンピックには届かなかったけれど 今はまっ白い灰に燃え尽きて、恋愛にも結婚にも夢はない」の山崎静代だ。「しずちゃん」こと山崎静代はお笑い芸人で、28歳のとき、たまたま先輩の通っているジムを見学してその場で入会。トレーナー梅津正彦の指導よろしきを得て、2009年にアマチュアC級ライセンスを取得、ロンドン五輪で正式種目になった女子ボクシングを目指した。残念ながらアジア予選で敗退、五輪出場はかなわなかったが、次のように振り返っている。

「普通の状態に戻った今、よくやれたなと我ながら感じています。ボクシングを通じて、『自信』を得ることができたと思うのです。これまでの人生で、ここまで苦しんで追い込まれたことはなかった。自分の性格の弱さとか、今まで見過ごして生きてきたものに、ボクシングを通してちゃんと向き合うことができた」

スポーツにおける男女平等

スポーツのレベルはさまざまだが、それぞれが新しい自己を求めているように見える。自分探しの旅、といえなくもない。私はこれまで、自分探

しは不毛の行為だと思ってきた。自分は大きな迷路である。「汝自身を知れ」とソクラテスも言い、孔子も言う。それほど自分を知ることは難しい。ふつうの人間には他人という鏡、対話できる他人があった方がよい。

スポーツのいいところは、1人ではできないことだ。対戦相手、チームメート、コーチ、何よりも観客の前ですべてをさらけ出す。私は自分探しをするよりは、よき他人探しをする方がよい、と思っている。自分は他人との関係の中で、初めて存在するのだから。その点、スポーツは必ず他人を必要とする。新しい自己発見の条件が、より整っているといってもいいだろう。

今や女性はスポーツという新大陸を発見する航海が始まったのではないか。マゼランやコロンブスが新大陸目指して船出して、大航海時代の幕が切って落されたように、女性たちの大航海時代が始まったのだ。

家父長的な血縁、地縁の重い絆を断ち切った軽い核家族は、男の子も女の子も差別せず、能力があるなら、その好きなことを伸ばしてやろう、というのが当たり前のことになった。強いて“女の子らしさ”を求める家庭はなくなった。重厚長大の家父長制的家庭から、軽薄短小の核家族へと、時代は大きくカジをきった結果、女性にスポーツの価値があらためて強く認識されたのだ。

例えば、1964年の東京五輪で優勝した女子バレーボール「東洋の魔女」チームは、大松博文監督率いる日紡貝塚が中心だった。大松は「オレについてこい!」のまさに家父長的な頑固・げんこつ親父的な指導者だった。娘たちは従順に父親のしつけを守り強くなった。それに比べれば、女子サッカーのなでしこジャパンの佐々木則夫監督と澤穂希たち選手との関係は、まるで仲の良い兄と妹のように見える。重苦しさがない。東洋の魔女もなでしこジャパンも、W杯で優勝したり、五輪で金、銀を取るために、大量の汗を流しているはずだが、なでしこの汗の方が揮発性が高い。サラリと乾く感じだ。

ロンドン五輪は「女性の大会」と言われた。スポーツを宗教的理由で禁じていたイスラム圏からも女子選手が参加した。また、すべての競技が男女で実施された。時代は男女平等の方向に確実に動いている。

子どもの技能・教師の指導力を高める

■学習の見通しに役立つ

本実践は、5年生の「バスケットボール」である。単元第1時のオリエンテーションにおいて、『体育の学習』を活用しながら、単元の進め方や学習の流れ、ゲームの進め方を確認した。

確認する際、『体育の学習』には、イラストを用いたわかりやすい解説が掲載されているため、子どもたちがこれからの学習活動についてイメージをもちやすかった。また、おさえるべき運動の特性や指導のポイント、場の設定の目安などについても紹介されているため、教師にとっても単元を組み立てる際に大いに参考になった。

■段階をふんだ指導に役立つ

単元を組み立てる際に、練習で習得した技能を活用してゲームを行い、さらにゲームを通してよりいっそうの技能の習得を図りたいという思いから、ステージ型の構成を考えた。そこで参考になったのが、『体育の学習』である。

『体育の学習』には、簡易化されたゲームが紹介されており、運動が苦手な児童でも取り組みやすく、また、ゲームを通して技能を身につけられるように工夫されている。本実践では、4年生でも経験した「ハーフバスケットボール」を単元の前半で行うことにした。

バスケットボールは、攻めと守りが瞬時に切り替わるため、苦手な児童は状況に応じた動きがわからず、意欲の低下につながりやすい。そこで、3対3の攻めと守りをはっきり区別したハーフコートでのゲームを行うことにより、ゲームにおける動きが明確になり、4年生での実践で身につけた技能を振り返ることができた。単元の後半では「オールコートバスケット」を行ったが、単元の前半で身につけた技能を生かしてゲームを行うことができたため、スムーズに移行することができた。

■チーム・個人練習に役立つ

単元の後半でチーム練習を取り入れたが、いざ練習内容を考える際に内容を決められないチームがいくつか見られた。そこで、『体育の学習』に掲載されているチームでの練習内容を参考にするようにアドバイスすると、自分のチームの実態に



学習の見通しをもつことができる



個人技能から集団技能への
練習のしかたの手助けに



練習やゲームでの個々の動きが明確になる

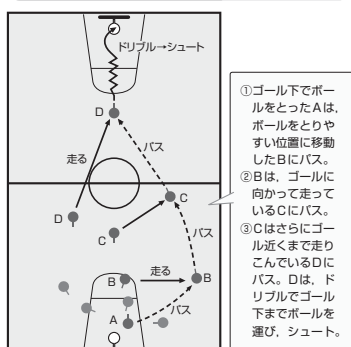


個人やチームのめあて、練習方法がわからないときに



兄弟チームの動きをアドバイスするヒントに

相手の守りが整っていないとき ▶たてパス作戦



この図式で、人の動きやボールの動きを共通理解



ホワイトボードでの作戦もみんなでイメージしやすい



みんなで取り組んだことは、さらなる意欲につながる！

合った練習を選択し、友達と教え合いながら取り組む姿が見られるようになった。また、『体育の学習』には、バスケットボールに必要なパスやシュートの技能がイラスト入りで紹介されている。そのイラストで示された動きをもとに、実際に自分でやってみたり、友達と動きを見合ったりして、主体的に練習に取り組む姿が見られた。さらには、単元が進むにつれて、兄弟チーム（互いの動きを見合うチーム）どうして進んで話し合い、ゲームにおける状況を設定しての合同練習を行うこともできるようになっていった。

■作戦を立てる際に役立つ

「オールコートバスケット」で、前半終了後のハーフタイムに作戦タイムを設定した。兄弟チームによるアドバイスをもとにして、後半につなげられるように、各チームにホワイトボードとマグネットを配付し、作戦を考えさせた。ここでも『体育の学習』が役に立った。

『体育の学習』には、作戦の内容が図式でわかりやすく説明されているため、ホワイトボード上で実際にマグネットを動かしながら考える際に、動きがイメージしやすくなる。ある兄弟チームが「相手がいないところに走り込んでボールをもらうように攻めるといいよ」とアドバイスして後半のゲームに臨み、その作戦がうまくいくと、「やった！」という歓声があがった。次の試合では、『体育の学習』に示された作戦をもとに、子どもたちがさらに作戦を工夫することで学習が深まっていった。

■評価に役立つ

『体育の学習』教師用指導書の巻末には、ワークシート集が掲載されている。「やってみる－ひろげる－ふかめる」でカードが構成されており、習得と活用の流れをおさえた授業づくりや、その評価を行ううえで大いに参考になった。

以上のことから、副読本を活用することによって、児童の技能を高めることができ、さらには教師にとっても、新学習指導要領の内容に沿った授業づくりを進めるうえでのよい指針となった。これからは子どもたちが楽しみながら技能を高めていけるような授業を、『体育の学習』を参考にしながら考えていきたい。（なかにし・せいじ）

スムーズな学習が展開できる！

■子どもたちの意欲を高める運動例！

本実践は、6年生の「体ほぐしの運動」の単位に関するものである。本単位ではまず『体育の学習』を活用しながら単元の進め方や学習の流れ、運動内容を確認した。その際には、運動の行い方をイメージしやすい写真とわかりやすい解説のおかげで、「早くやりたい！」「おもしろそう！」と、子どもたちの意欲を高めながら運動の行い方を理解させることができた。

■教師の立場からも使いやすい副読本！

『体育の学習』は教師の視点から見ても、単元の学習のねらいを確認したり、運動の行い方をイメージしたりするのに活用できる。それによって、授業の前に具体的な言葉かけや指導方法を考えるうえで大いに役立てることができる。

さらに、『体育の学習』の内容をもとにして掲示物を作成し、運動内容の説明に用いることもできる。その結果、運動の行い方について効率よく指導することができ、スムーズに実践につなげることができた。

■わかりやすい学習過程！

また、『体育の学習』に掲載されている単元の構成は、単元のねらいや学習の流れが明確でわかりやすい内容になっている。

そのため子どもたちは、「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」の3つの過程で学習を進めていくことで、「体ほぐしの運動」における目的である「体の気づき」「仲間との交流」「体の調整」の3つのねらいへの理解を深めることができた。

■だれもが楽しく行える

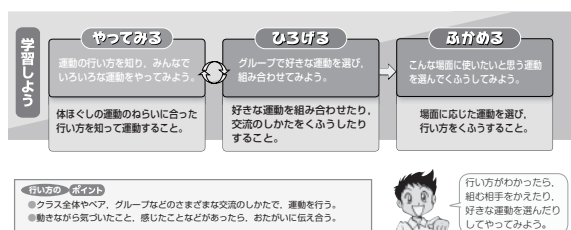
体ほぐしの運動例を紹介！

『体育の学習』には、肩をマッサージしたり、背中をトントンたたいたり、体の上を転がったりするなど、仲間と体を触れ合わせる運動例が数多く紹介されている。

それらを参照することで、子どもたちは、ペアを組んでのリラクセーション、『大根ぬき』、『風船を使って』など、自然に手をつないだり体を触れ合わせたりするさまざまな運動があることを知り、楽しく実践することができた。



授業のスタートで活用する



『体育の学習』掲載の単元の学習の流れ



『体育の学習』に掲載されている運動例を掲示物として活用し、運動の前に確認させる



リラクセーションで心もスッキリ



『大根めき』に挑戦する…「やってみる」



交流のしかたを工夫する…「ひろげる」



グループで運動を選んで行う…「ふかめる」



学習の振り返りでも『体育の学習』を活用できる

■授業の中でも簡単に確認できる！

『体育の学習』は、ここまでで取り上げたように授業の導入場面だけでなく、新しい運動内容を紹介する際にも活用することができる。

例えば、新しい運動を行わせようとするたびに、紙面を見せて運動内容などを説明すると短い時間で理解させることができる。そして、説明の時間を短くできるので、45分の中で十分な運動量を確保することができた。

また、掲載されている運動例の写真を掲示することによって、より効率よく活動することができた。そのため、運動の実践に時間をかけ、子どもの運動量を効果的に確保するうえで、とても親切的な副読本である。

■単元の学習の流れ「やってみる」「ひろげる」

最初はグループごとに『大根めき』に挑戦した。運動内容のイメージを明確にもつことができていたので、楽しく行うことができた。

そして一度やってみた後に、グループごとに作戦タイムの時間をとった。隣どうしで仲間を入れ替えて交流したり、腕の組み方を工夫したりするなど、運動の行い方を広げることができた。

■単元の学習の流れ「ふかめる」

さらに、授業の後半では、グループごとにもう一度やってみたい運動を選び、運動の行い方を工夫する姿が見られた。また、運動の工夫を考える際には、『体育の学習』に掲載されている吹き出しの言葉についても参考にしていた。

そして実際に運動する中で、「体のどこでついてもいいよ」「風船の下にみんなで動くよ」「人とぶつからないようにね」など、吹き出しの内容を生かして互いに声をかけ合いながら取り組んでいた。

■授業の振り返りでも活用できる！

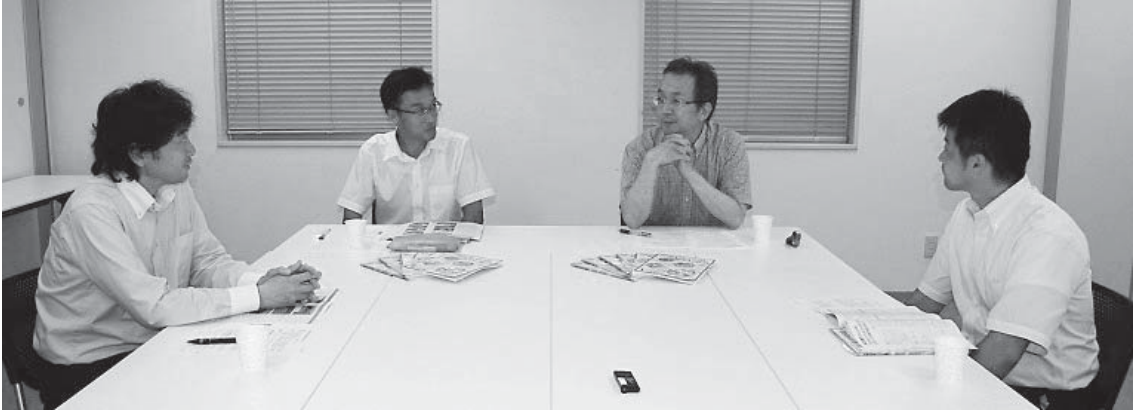
授業の振り返りでは、「体の気づき」について、学習カードに記録した。さらに、『体育の学習』を活用し、紙面を用いて本時の運動内容を振り返ったり、次時以降の運動内容を確認したりすることもできた。

(たかぎ・こうすけ)

『体育の学習』を使った授業

座談会：副読本の力、『体育の学習』の力

～体育の授業で副読本を使うことの意義～



司会・東京学芸大学教授 **松田 恵示** 埼玉県飯能市立美杉台小学校教諭 **福島 真実**
東京学芸大学准教授 **鈴木 聡** 東京都世田谷区立松丘小学校教諭 **高木 孝輔**

■ぼくたちのゲームのことがかいてある

松田 本日はお忙しいところ、お集まりいただき、ありがとうございます。今日は体育科の学習指導において副読本を使うということがどのような意味をもつのか、副読本を使うことでどのように学習が広がるのか、ということについて具体的に考えていきたいと思っています。本日お越しいただきました先生方には、すでに『体育の学習』を使った授業の実践事例を『こどもと体育』にお書きいただいておりますので、まず、授業を実践いただいた当時の様子や現在の取り組みなどについてご紹介いただければと思います。

鈴木 今年の3月まで小学校の教員をしており、昨年度に指導していた1年生のボールゲームの単元で『体育の学習』を使った授業の実践事例を書かせていただきました（本誌156号掲載）。現在は、大学で教員志望の学生に向けて、体育の授業創りについて指導しています。そうした将来教員を目指す学生を指導をする際にも、『体育の学習』は子どもの目線に立って内容が構成されているので、授業のリアリティを学生に伝えることができるといよいよ評判を得ています。

福島 昨年度は6年生の担任をしていましたが、去年の6月に鉄棒運動の単元で『体育の学習』を使った授業の実践を行いました（本誌156号掲載）。その際に、これほど副読本を使って、子どもたちどうしが自ら教え合いをするのかということに驚くとともに、感動したことを覚えています。

高木 今年の6月に6年生の体ほぐしの運動の単元で授業実践を行いました（今号P.18-19掲載）。『体育の学習』には、いろいろな運動の例が写真やイラストでたくさん掲載されているので、子どもたちは動きをイメージしやすかったようです。また、教師が学習の進め方や運動の行い方などを説明しなくても、子どもたちがすぐに学習内容などを理解できるので、運動をする時間を長く確保することができました。

松田 まずは実践を振り返ってご紹介いただきましたが、『体育の学習』を使うことで子どもたちが学びを深めたり、授業についてのイメージもちやすくなったという感想が出てきました。それでは、授業の中で実際にどのように子どもたちが『体育の学習』を使っていたのか、具体的な様子や事例を教えてくださいませんか。

鈴木 1年生の「まとあてゲーム」の実践の中でゲームにだんだんと慣れてきて次の段階に移ろうとしたときに、子どもたちからゲームをよりおもしろく改善していこうとする意見がいろいろ出ました。しかし、そうした意見を聞いて具体的なイメージをもてる子どもとそうでない子どもとがいました。今までは、私が手描きのイラストなどを使って説明していましたが、それでもまだ抽象度が高く、学級全体に伝わっているかどうかについては不安がありました。しかしそこで『体育の学習』を使ってゲームの説明を行うと、子どもたちの発言していたようなことが具体的にイラスト化されているので、子どもたち全員に一度でゲームの具体的なイメージをもたせることができました。そのときにある子どもが、「ぼくたちのゲームのことがかいてある」と言ったのがおもしろかったですね。普通子どもたちは「教科書を学ぶ」というスタンスだと思いますが、教科書の具体的なイラストを手がかりとして自分たちのゲームを発展させていく姿から、「教科書で学ぶ」という授業が実現できたと思います。この実践授業のように、入学したばかりの1年生の子どもとでも、自分たちのやっていることを確認しながら、子どもとともに授業をつくっていくことができるという点で、役に立ちました。

松田 「ぼくたちのゲームのことがかいてある」というのはおもしろい表現ですね。

『体育の学習』を使うことで、自分の学習課題を見つかったり、子どもたちがお互いに確認し合ったりということもありましたか。

福島 鉄棒運動の実践の中では、新しい技の練習をする際に、子どもたちが『体育の学習』に掲載されている連続写真で技のポイントや流れなどを自分の実際の動きと見比べていました。そして各自が自分の動きの改善点を考えたり、他の子どもと技を教え合ったりしていました。

松田 自分たちが取り組んでいる学習課題に対してのポイントを、子どもたち1人ひとりが自ら考え、実践することができていたということです。

高木 動きのポイントになる吹き出しの言葉は教師から声かけをする際の手がかりになりますし、子どもどうしてもその文言を使って自然に声かけができていました。それにより、いろいろな運動

をすることや、運動を通して関わり合うことの気持ちよさについて、具体的な言葉によって実感できていました。

松田 子どもたちがねらいやめあてをもって意欲的に活動をするためには、副読本のような資料が必要不可欠なものとなるということでしょうか。もしそうだとしたら、副読本がなければ子どもたちのそうした活動は出にくいものなのでしょうか。

福島 例えば鉄棒運動などを教えていると、教師の言葉をもとにして徐々に子どもたちの教え合いが広がっていく感じがします。しかし、副読本を使うと、『体育の学習』に書いてある技のポイントの言葉を使って最初から教え合いができました。さらに、自分のつまずきを考えて、いくつか紹介されている練習のしかたの例を参考に、普段より意欲的に活動ができました。つまり、『体育の学習』を活用することで、活動がよりスムーズにできたと思います。また、児童が1人1冊『体育の学習』を持つことで、練習して、その後すぐに各自が自分の技の出来栄を確認できるのでよかったと思います。

松田 副読本は、子どもたち1人ひとりが自分のテンポやリズムで情報を得て学習を振り返ったり、得た情報をもとに学び合ったりするという、自分や友達の学習課題を評価できるツールであるということですね。一方で副読本以外に、自作のプリントや学習カードなどもあると思いますが、それらと副読本の違いというのはどういった点でしょうか。

鈴木 これまで使用していた学習カードは、自分のめあてや振り返りを記載したり、技のポイントを数点載せて、子どもたちが参考にしたりするものでした。それに対して副読本は、学習の道筋を確かめたり発展させたりするうえでのガイドラインとなっています。つまり、1つひとつのねらいを達成させる手立てとして学習カードは機能していましたが、副読本は、学びのストーリーを描いていくうえで活用できるところに独自性があると思います。

■子どもが自主的に単元の流れを見通せる

松田 ここまでのお話は授業1コマの中での子どもの学びが中心でしたが、数時間にわたる単元全体を通じての副読本の有効性を考えるとどん



なことがあるでしょうか。子どもたちが自分で学習を進めていったり練習方法を考えたり、単元全体の流れを子どもたちが自ら見通しを立てて学習に取り組めるということがあるのでしょうか。また、

授業の中で次に何をするのか、ということ副読本を読んでいる子どもたちが自然にイメージできるようになるというのは、先生方にとって指導をしていくうえで意味があるものなのでしょうか。福島 『体育の学習』にはどの単元にも“やってみる—ひろげる—ふかめる”という基本的な流れが書いてあり、それが子どもたちの頭の中に入っていましたので、その学習の流れに沿ってスムーズに授業を進められました。

高木 私の実践の場合は体ほぐしの運動なので、何らかの技能の習得などはありませんでしたが、運動内容を授業の最初に『体育の学習』で確認しました。そして実践に入ると、子どもたちから「こんなことをやってみよう」という声が出て自然と運動が広がっていきました。今回は、新しい運動に入るたびに本を開いて確認するという時間をとれなかったのですが、代わりに『体育の学習』に載っている写真を掲示資料として準備し、新しい運動を行う前に子どもたちを集めて見せました。それによって簡単に動きを確認することができました。また、授業の最後の振り返りを『体育の学習』を使いながら行くと、授業の流れに沿って振り返ることができると思います。

鈴木 授業や単元の先を見通すということについてですが、単元や授業が「次にどう進んでいくんだろう」ということについて、子どもたちが自主的に考えることができるようになったと思います。もちろん子どもたちが『体育の学習』をずっと読んでいたわけではないのですが、ほかの教科では子どもが授業に先んじて教科書を見るということはあまりないでしょうし、『体育の学習』がそうした姿勢を身につける契機になったようです。

■授業づくりや児童の評価にも使える

松田 改訂された新しい学習指導要領においては、課題解決学習として思考力、判断力、表現力など

が重視されています。そしてそれらすべてをふまえて、子どもたちが主体的に学んでいく姿勢というものが求められていますが、体育でそのような学習をするためには副読本のような教材は効果が高い、さらに言えば、なくてはならないものであるという感じですね。しかしその一方で、体育とは体を動かす学習であるから、体育の授業に教科書に準ずる本をもっていくことには抵抗感があるという方もいらっしゃるかもしれません。そもそも子どもたちには、体育の授業で本を使うということに抵抗感はないのでしょうか。

福島 私も実践授業をする際に初めて副読本を使ったので、正直、子どもたちが副読本を使うことに戸惑ったりして学習がスムーズに展開できないのではないか、と多少心配でした。しかし、子どもたちが副読本を使い、教え合っている風景を見て「使ってよかった」と思いました。子どもたちも、「動きがわかってよかった」などの感想を書いていたので、その場ですぐに『体育の学習』で技のポイントや練習のしかたを確認できるというのはよかったのだろーうと思います（写真1）。

松田 体育の授業で『体育の学習』のような本はいらない、という考えは古い負の遺産なのではないか、ということですね。

今まで出てきた中で、子どもたちが自分の活動を見直したり、子どもどうして学んだらという活動がありましたが、『体育の学習』があると子どもたちもお互いを評価し合えるだけでなく、先生たちも体育の評価をしやすいということはありませんか。

高木 体育の授業の中で「思考・判断」という要素を具体的にどんなところで評価するのか、ということ非常に難しく感じていました。しかし『体育の学習』を使うと、掲載されている動きや



〔写真1〕技のポイントをすぐに確認できる。



ポイントに子どもたちが着目して、自分たちの動きの中に取り入れているのが見られました。そうした創意工夫をしている様子から「思考・判断」を評価することができました。

福島 器械運動の単位では、練習のしかたが載っているの、子どもたちがそれらに着目して各自が工夫して活動していました。そうした姿勢を評価することができました。

鈴木 「作戦をたててゲームをしよう」という課題に取り組んでいるときに、子どもたちは、『体育の学習』を参考にして作戦をたてようとしていました。また、『体育の学習』の内容を見ながら自分たちの活動を振り返ってもいたので、そうした活動を評価することができました（写真2）。

松田 評価の観点を先生方が子どもたちと一緒につくったり、共有したりできるということですね。ほかにこれまでお話したようなこと以外で「『体育の学習』をこんなふうに使ったら効果的だった」という新しい使い方やアイデアはありますか。

鈴木 授業の中ではないのですが、若い先生や体育の授業創りで悩んでいる先生と学年を組んだ際に、一緒に教材研究をするときにも『体育の学習』を使っています。先生方も紙面を見ながらだと実際の授業をイメージしやすく、若い先生方の授業の質の向上につながれると思います。つまり教員研修に使えると思うのです。そうして先生自ら『体育の学習』のよさを感じることができるので、子どもたちにも持たせたいですね。

松田 先生方の学習指導の力にも大きな影響を与えるということですね。

高木 同じく授業以外の場面ですが、子どもたちが1人1冊持っていると、体育の授業以外でもすぐに手に取って見ることができるので、それが「こんな運動やってみたい」という意欲にもつながっていると思います。

松田 小学校の体育では、子どもたちが生涯にわたって運動に親しむための資質や能力、意欲を身につけることが重要になります。そのためには、さまざまな運動の特性や楽しさにふれたり、技能や知識を身につけたりすることが大切となり、それらを身につけるためには主体的な学習をしていかななくてははいけません。そうした「主体性」というものを身につけさせるためにも、副読本が子ど

もたちの手元に1人1冊行き届かなくてははいけないのではないか、と思います。

■子どもにとって

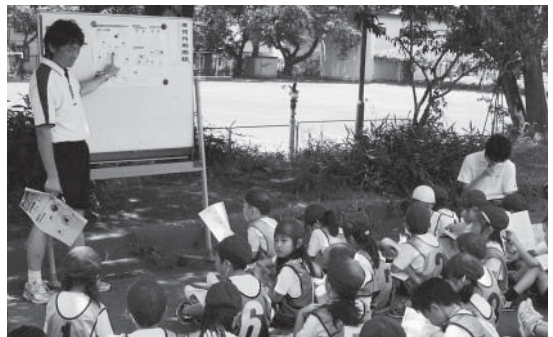
理想的な学習過程

松田 『体育の学習』の特長として“やってみる—ひろげる—ふかめる”という学習過程や、子どもたちの視点に立ち、子どもがやってみたいと思える内容を重視して取り上げていることなどがあげられますが、そうした『体育の学習』の特長については授業の中でどのように感じられましたか。

高木 紙面にない運動例をやったこともありましたが、子どもからは紙面に載っている運動のほうが好きでした。やはり子どもの興味・関心の点から、厳選されているのだろーと思いました。

福島 器械運動では、“こんな運動してみよう”というコーナーが最初にあるので、まずはそれに組みこませることである程度の力を共通に身につけさせることができます。このコーナーは、技を身につけるのに必要な身体感覚を養うコーナーです。学年が上がっていくといろいろな能力が必要となるので、こうした身につけるべき要素がわかりやすく提示されているというのはいいですね。

鈴木 “やってみる—ひろげる—ふかめる”という流れ、学習の道筋は、子どもたちの運動への関わり方がだんだんと深まって無理なく運動に親しんでいける学習過程だと思います。教師の側からのトップダウンではない、子どもの目線に立った理想的な展開ではないでしょうか。私は年度の最初の方は『体育の学習』に示された流れの通りに使い、子どもたちに学習の進め方を体得させます。



〔写真2〕『体育の学習』を使って振り返る。



そして2学期からは単元の導入のページだけ使って、その先の展開については子どもたちに考えさせるということをしていました。すると、学習の流れが定着しているので、自ら次の学習の展開を考

えていくことができます。そうした「学習をどのように進めるか」ということを考えることは、主体的な学び手を育てるとともに、思考力を身につけることにつながると思います。これも、『体育の学習』を使って授業を創るよさの1つだと思います。

高木 学習過程の“やってみる—ひろげる—ふかめる”というのは子どもたちにとってとてもわかりやすい言葉ですね。どんな学習をしたらよいのか、わかりやすいと思います。私もこの展開に沿って授業を行いました。すると、子どもたちが自ら再度取り組みたい運動を見つけたり主体的に取り組んでいったりという姿勢を見て取ることができました（写真3）。

松田 先ほど課題解決学習という言葉を出しましたが、教師の側が課題を提示するのではなく、まずは子どもたちが課題を見つけなくては課題解決学習とはなりません。そのためには、子どもの気持ちが運動に向かう中で、まずは身につけている力で目いっぱい運動に取り組み、次に自らの力を高めていき、最後にあらためて身につけた力で運動に取り組む、という“やってみる—ひろげる—ふかめる”の流れは、子どもたちのその気持ちの変化に合ったものであり、子どもたちの興味・関心に合った課題解決学習にふさわしいものだと思います。



〔写真3〕再度取り組みたい運動をやってみる。

■体育における学習言語を身につける

松田 「めあて」など、授業の中でしか使わないいわゆる「学習言語」という言葉があります。そうした言葉は授業を秩序だてるうえで重要なものですが、ふだんは使わない言葉であるがゆえに、なじめない子どもたちもいます。副読本を使うことでそうした言葉にも自然になじめるようになるのではないのでしょうか。

鈴木 「学習言語」として例にあがりました「めあて」というのは、非常に難しい言葉です。子どもによっては「めあて」とはどんなことなのか、そもそもどんなことを考えるべきなのか、といったこともわからない場合があります。体育というのは体を動かすのがメインの教科であるがゆえに、授業の中でそうした言語の定義の確認についてなどは、重点がおかれなことが多いようです。そのため用語の意味がわからない児童は授業においていかれてしまいます。しかし、そうした状況で副読本を使うと、副読本の中にあがっている内容を手がかりにして考えられるので、自ら「めあて」をもったり、課題を見つけたりすることができるようになります。また、競技のルールを確認する際にも、ルールに関わる言葉が文章化されているので共通理解しやすいですし、一般的なルールと授業内でのルールとの差異を認識するというのもしやすいので、多くの子どもたちの学びを確かなものとしていくことができると思います。

福島 技のポイントの説明が簡潔に書いてあってわかりやすいですね。さらに、説明が誰でもわかる言葉であるため、そこから子どもたちが自分の考えを発展させ、自分の言葉にアレンジしていくこともできるようになっています（図1）。

高木 言語の面で言いますと、子どもたちが実際にアドバイスをし合う場合、最初はどんな言葉を

やってみる

できそうな上がり技に挑戦しよう

例1 ひざかけ上がり



〔図1〕簡潔でわかりやすい技の説明。



使っていいのかわからないと思います。そこで、副読本があると、「アドバイスをする際にはどんな言葉を使っているのか」ということがわかるでしょうし、副読本にある言葉を参考にして自分で考えたり、運動をする際のコツとして理解したりすることも促されると思います。

松田 今出てきたような簡単な言葉というのは、簡単で基本的だからこそ学習されるべきですね。子どもは生活の中で言葉を学んでいきますが、たとえば「倒立前転」という技について、子どもたちは最初、それぞれ自分なりの言葉でその動作を説明します。その段階から、「倒立前転」という言葉を使えば誰でも理解でき、それがどんな動作なのかということも伝わる、というところに至るには、やはり副読本に書いてある言葉が、そうした言葉を定着させていくうえで役に立つでしょう。

体育ではなく社会科の授業の例ですが、「川下」という言葉がわからない子どもは、「川下」という言葉を使って説明をされても説明自体が理解できません。「川下」が具体的にどんなところなのか、という説明があってはじめて理解できるようになります。このようにやさしい言葉や一般的な言葉でも、生活の中でなじみのない言葉というのはいろいろあると思います。そうした言葉を学習の中で拾っていかねばならないでしょうね。

■これからの体育、これからの副読本

松田 本日は副読本の効果や価値、必要性についていろいろな要素が話題にあがりましたが、それらがすべての先生と共有でき、そしてすべての子どもたちによりよい体育の授業が広がってほしいと思います。最後に、これからの体育学習と副読本について、先生方からお話を伺いたいと思います。

鈴木 世の中でICTの活用ということが言われており、体育で学習する技やゲームの様相の動画が全種類欲しい、などという声もあるようです。それはそれで便利だとは思いますが、私はむしろ紙ベースの静止画、イラストも充分よいのではないかと考えています。今後、副読本をどういったものにしていきたいかということにも関係しますが、『体育の学習』には、技のポイントや授業の流れの説明について精選された言葉が載っておりますし、イラストも細部にわたってこだわったも

のが掲載されていると思います。動画だと最初から最後までを子どもに見せて、そのまま理解させたり、動画のやり方そのまま先生が教えたりできます。しかし、副読本を使って、ポイントとなるイラストや写真を見ながら授業をすると、子どもたちはただ見るだけでなく考えながら授業に取り組むでしょうし、先生方も方向性を縛られることなく、副読本をきっかけにしてそこからいろいろな方向に授業を展開できると思います。また、これから改訂していくときには、“やってみる—ひろげる—ふかめる”という学習過程のもと、「子どもが自ら豊かな学びを創っていける」というメッセージをより明確に伝えられるものを作っていく必要があるでしょう。福島 イラストと同様に写真にもこだわりがあると思います。「他の技をやりたい」となったときに、動画として先生方が見せるのではなく、簡単に子どもたちが各自で確認できるという点でも本になっているよさがあると思います。

高木 以前、道德の先生が、道德の副読本を読むの時間にすぐ読めるようにしている、というのを聞いて『体育の学習』も日常の運動の助けとなるようになるのではないかと思います。実際に子どもたちに持たせていると、授業でやった動きを体育の授業の時間以外でもやってみたいという声が子どもたちから出てきました。そうした運動への意欲を子どもたちがもてたのがよかったと思っています。今後も子どもの意欲をより高めていきたいですし、そのための資料として副読本はとても使えると思いました。

松田 あらためて副読本の大切さやよさ、今後いかにうまく使っていくかなどのさまざまな示唆を得ることができました。

言語活動の重要性はいろいろな教科でも言われていますが、体育においても自分の行っている活動を相対化して考えたり、自分の言葉や記号に置き換えたりするという活動は求められています。そうした活動の助けとなっていくのが『体育の学習』のような副読本なのでしょう。本日は長い間、ありがとうございました。 ■

こんなときは？

教えて！体育指導の

くふうとアイデア

回答者 東京都昭島市立武蔵野小学校主幹教諭
美越 英宣

ゲーム・ボール運動の学習で、審判をつけずにセルフジャッジでゲームを行うとき、トラブルが起きないようにするにはどのようにしたらよいでしょうか？（女性：教職歴4年）

小学校の体育の学習で児童に教える内容は、「技能」「態度」「思考・判断」の3つで構成されています（『小学校学習指導要領解説 体育編』）。その中の「態度」には、どの運動領域にも、①意欲②規則やルールを守り、友達とかかわること、③準備・片づけ④安全の4つが示されています。

ゲームの中でのトラブルは、上記の②「規則やルールを守り、友達とかかわること」に深くかかわっています。また、「ゲーム」の低・中学年の「態度」の目標の中には、「勝敗を受け入れる」ことが示されています。

この意味は、「トラブルがないようにする」というよりも、「トラブルを生かして友達とのかかわりを確かめ合い、結果的に勝敗を受け入れることができる」ととらえることができます。

トラブルが起これないことはありません。逆に、トラブルをもとに教師が指導を行い、児童が学び、トラブルを解消することができれば、学級の成長に変えていくことができます。また、体育だけでなく、他教科・生活指導の面でもこれらのトラブルの対処のしかたが生きてくるようになります。

トラブルは、セルフジャッジでも審判がいても起きます。授業でトラブルが起きないようにするためには、教師がトラブルを予測する必要があります。

トラブルを予測するには、以下の3つのポイントがあります。

(1) スポーツマンとしての態度をとれるようにする

ゲームを行ううえで、スポーツマンとしての態度を教えます。



●仲間と力を合わせ、真剣にゲームに取り組めば取り組むほどトラブルが……。



点を取られたことや負けたことが、自分や自分のチームの活動のどのような行動が原因なのかを発問します。納得のいかない児童に冷静に考えさせるだけでなく、一緒に考え、そのうえでどのような態度をとることがいいのか、結論を出します。そして、その態度のよさを学級全体に伝え、スポーツマンとしての態度を広げていきます。

ゲーム・ボール運動の学習で、涙を流して友達を責める児童はよくいます。この児童は、本当に勝ちたい気持ちでいるのです。この姿は、ゲームやボール運動の特性である「集団と集団で競い合い、仲間と力を合わせて競争する」ことを十分に味わうことができているといえます。

ただ、思いが強すぎてトラブルに発展してしまっているだけです。その児童の思いをくみ、「正しい態度」を教えていくことが大切です。

(2) ルールを決める

低学年の「鬼遊び」の学習で予測されるのは、鬼がタッチした・鬼にタッチされていないというトラブルです。このトラブルは事前に予測できるので、児童と話し合い、規則を決めることで解消できる問題です。

例えば、タッチでもめたときは鬼のタッチを認める、タグなどをつけてタッチの代わりにするなど、事前に児童と話し合って規則やルールを決めることでトラブルは減っていきます。

(3) ジャンケンで決める

前もって予測したうえで規則やルールを決めておいても出てくるトラブルがあります。

例えば、「線を踏んでボールを投げると得点にならない」というルールがあるとします。ゲームの中では、踏んだか踏んでいないか、判断しづらいときがあり、トラブルになることがあります。

こういうときは、「ジャンケンで平等に決める」ということを事前に児童と話し合っていて決めておきます。児童の中で「お互いが同じ条件で行ったのだから、ジャンケンの結果を受け入れる」ことを納得するように促します。そうすれば、児童の間でジャンケンを行うようになり、トラブルが大きくなる前に自主的にトラブルを解消することにもなっていきます。

以上の3つのポイントの指導を重ねることにより、児童は適切な対応のしかたを身につけるようになっていきます。

器械運動では、場の準備に時間がとられてしまい十分な活動時間が確保できません。効率的に場を準備し、活動時間を確保するにはどうしたらいいですか？（男性：教職歴3年）

前述した通り、『小学校指導要領解説 体育編』で、体育科の内容の1つである「態度」には、「準備・片づけ」「安全」について示されており、児童が学ぶ大事な学習内容になります。

「準備・片づけ」は、「友達と一緒にすること」（低・中学年）、「分担された役割を果たすこと」（高学年）が例示されています。また、「安全」は、「場の危険物を取り除くこと」（中・高学年）、「器械・器具の安全に気をつけたり（低学年）、確かめたり（中学年）、気を配ったり（高学年）」することが例示されています。

特に「安全」については、児童はもとより教師が気をつけることが重要です。どんなによい授業ができたとしても、けがや事故は、運動の楽しさや喜びを消し去ってしまうからです。

そのうえで、安全な「準備・片づけ」のために以下のことを指導します（授業で活用する場合の用具の指導で構いません）。

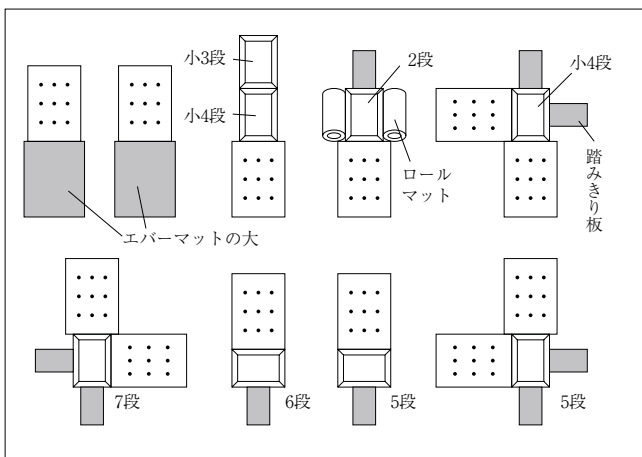
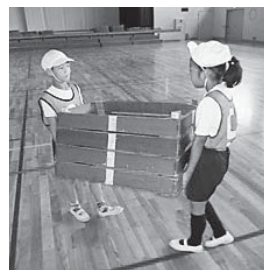
- マット…引きずらずに4人で運ぶこと。
- とび箱…まず1段目だけを友達と2人で運ぶこと。2段目以降も友達と2人で運ぶこと。

これらのことを徹底するためには、初めは指導に時間がかかりますが、安全のためですので、丁寧に行うことが必要です。

運び方を児童が理解できれば、安全にかつ、すばやく準備や片づけをすることができます。



- 写真左…マットは4人で運ぶ。
- 写真下…とび箱は2人で運ぶ。
- 下図…「場の設定の図」の例（とび箱運動）



そのうえで効率的な場の準備を行うには、以下のポイントがあります。

(1) 場の設定を図で示す

マット運動やとび箱運動では、どの器械・器具をどの場にどのように置くか、言葉だけでは伝わりにくいことがあります。また、児童が自主的に準備、片づけをすることを考えても、場の設定を図で示すことは効果的です。

(2) 班で準備や片づけの場を提示する

場の準備や片づけを分担することは、時間の短縮になり、効率的にもなります。

場を4つや6つに分けて班ごとに場の設定の場所を指示して、準備・片づけをします。ただし、いつもマットだけ、とび箱だけなど、準備や片づけの器械・器具に偏りがあっては、児童の態度面は育ちません。班をローテーションさせたり、準備と片づけでは違う場にしたりして、全児童がすべての器械・器具に対して、安全に準備や片づけができるように配慮することが大切です。

（みこし・ひでのり）